

## 論文要旨

### 奄美のシマ（集落）にみる文化資本を活かした地域経営 —長寿と人間発達を支える伝統と協働のダイナミズム—

富澤 公子

#### 1 はじめに

長寿・超高齢社会が進行する中で、加齢を衰え・衰退とみる「福祉的」でネガティブな老年学が世界的な主流をなしている。本論文は、これら既存の高齢者観に真っ向から対峙する。超高齢期は、介護リスクや認知症リスクが高まる時期とされるが、多様な潜在能力と文化的価値をも有している。本論文は、後者の側面に注目し、それらを引き出し活かしていく長寿地域の地域経営とそこに機能する社会経済システムを明らかにする。

これまで、効率や若さを価値とする経済成長下では超高齢者の経験や潜在能力は注目されず、むしろ、超高齢者は支援コストのかかる対象としてネガティブに評価されてきた。しかし、祭りや伝統文化が継承されているコミュニティでは、超高齢者は地域の文化資本を体化する存在として地域の文化に寄与し、さらに進んで、超高齢者の能動的・主体的行為が地域の新たな文化や経済に貢献する可能性も少なくない。

本論文では、文献調査やフィールド調査、インタビュー調査、アンケート調査からの実証を踏まえ、学際的視点から超高齢者のポジティブな側面と、長寿・超高齢社会における多世代共生と健康長寿を実現する地域コミュニティのあり方を考究する。

#### 2 問題認識と研究課題

##### 2.1 問題認識

従来、加齢は、身体機能の衰退や要介護リスク、認知症リスクの高まりとして、ネガティブにとらえる傾向がみられる。この傾向は、次（現役）世代における医療費などの社会保険、租税負担の増大に注目する結果となり、世代間の利害対立を不可避的なものとして固定化する。

本研究では、心身機能の低下からサクセスフル・エイジング（幸福な老い）には否定的と捉えられる85歳以上の超高齢者を対象とし、老いと関係する彼ら／彼女らの経験や叡智、超越等の潜在能力に光をあて、彼ら／彼女らの人間発達を支援し、世代間の共生を実現している長寿地域の地域経営とそこに機能する社会経済システムを明らかに

することを目的としている。

その実証の地として、奄美のシマ（集落）のコミュニティ特性に注目し、老年学や心理学、社会学、経済学、経営学、民俗学や文化経済学などの多様な学際的成果を取り入れ解説する。それらを通じ、過疎化や高齢化が進行し、GDPの経済指標では低域にある奄美が、衰退地域ではなく逆に健康長寿と幸福な老いを実現している地域経営のモデル地域であることを明らかにする。

これから、ますます進展する長寿・超高齢社会は、少子高齢化の深刻化として危惧される未来ではない。むしろ、それとは逆のシナリオ、可能性を示唆するのが、奄美の事例である。健康長寿者のもつ老いの価値に光を当てることによって、新たな生き方や地域のあり方が浮かび上がる。多世代との共生のなかで地域の文化資本を活かしたつながりやきずなが強固に形成され、健康長寿と幸せな老いが実現していく。人生100年時代のサクセスフル・エイジング（幸福な老い）には、それぞれの地域にある文化資本を活かした地域経営が重要となる。本研究は、こうした問題認識と視点で貫かれている。

## 2.2 研究課題

本研究ではこれらを明らかにしていくために、次の4つの研究課題を設定し考察していくこととする。

一つ目は、超高齢者の人間発達の現場として、健康長寿者の多い奄美のシマ（集落）のコミュニティに焦点を当て、祭りや伝統行事、習慣などの（無形の）文化資本を活かし長寿を実現している地域経営と社会経済システムを明らかにすることである。

二つ目は、超高齢者の精神的次元の力量ともいえる老年的超越傾向に注目する。超高齢者の存在は、若い頃の産業と生活における労働の苦しみや喜びという体験を経たのちに身につけた心の落ち着き、生活や仕事の知恵、熟達した技などを含む「精神的資産」として、その存在は次（現役）世代へ影響を与えうると把握する。

三つ目は、虚弱化する身体に適応しながら利他性への移行や世代性が高まっていく、超高齢者の幸福感の醸成に注目する。幸福の客観的基礎には、心や知恵の問題だけでなく仕事を通じての協働による学びあい・育ちあいも幸福への欲求として把握できる。その過程で互いの人格を尊重しあうという信頼関係が形成される。超高齢者は、若い頃の厳しい仕事や生活と比較して現在を生きている。超高齢者の幸福感は次（現役）世代の幸福とは質的に異なっていることを明らかにする。

四つ目に、人と人とのつながりのなかで高まる人間発達と生活の質に注目する。つながりやきずなという社会関係資本の概念は、単なる人間同士の信頼関係というよりも、仕事や生活上の「困ったときはお互い様」という協働と関わる信頼関係である。そこには、「乏しいものを分かち合う」という利他の精神が公正な分配に係わる幸福感を醸成し、信頼関係を深めることが見えてくるのである。

### 3 分析枠組みと実証方法

#### 3.1 研究対象者とそのねらい

本研究の対象者は超高齢者である。これまでの通説では、超高齢期は長寿ゆえの脆弱さが顕著な時期として、サクセスフル・エイジング（幸福な老い）には否定的である。しかし、筆者のこれまでの長寿地域での超高齢者研究を踏まえ、超高齢者をポジティブな視点から捉え直ししている。超高齢者は、現役世代からもたらされる経済資本からの支援（年金制度や医療制度、経済的援助）を受けながら、コミュニティの支えの中で、これまでの経験から蓄積された英知やノウハウなどの潜在能力を地域に還元しうる存在となりうる。そうした超高齢者の潜在能力に光を当て、次世代との共生システムの要をなす存在として位置づけている。

#### 3.2 研究対象地とそのねらい

本研究の実証の場は、「長寿で子宝の島」と称される伝統的共同体の残る奄美のシマ（集落）である。奄美は100歳以上の百寿者が多い地域であり、超高齢者たちの生き生きとした笑顔と長生きを楽しんでいる暮らしに注目する。自然の営みや循環を大切にする暮らしや祭り、伝統文化が継承されたコミュニティのなかで、超高齢者は先代から伝わる祭りや儀式、踊りの所作、ノウハウを体化した存在として、若い人に伝える役割の場がある。奄美の事例から、コミュニティ要因が超高齢者の健康長寿と幸福な老いに関連することが考察可能となる。

#### 3.3 実証・分析方法

実証方法として、祭り・シマ（集落）の居住空間などのフィールド調査や、超高齢者や集落区長への質問紙によるアンケート（量的）調査、超高齢者の百寿者と同居する家族へはインタビュー（質的）調査を実施する。分析は、量的調査は統計ソフト SPSS で

分析し、質的調査は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析法を用いて分析をする。

#### 4 先行研究の課題と本研究の視角

本研究が主眼としているのは、従来のネガティブな超高齢者論から脱却し、超高齢者の人間発達に焦点を当て、それらを形成・発展させる地域のコミュニティ要因を明らかにすることである。その実証のために、奄美のコミュニティのベースにある伝統文化を基軸にした地域経営の機能を解説する。

この試みは、今後進展する長寿・超高齢社会において、健康長寿と幸福な老いを実現するうえでの有用な示唆が得られるものと確信する。しかし、このような視点からの先行研究は見られない。そのため本研究では、老年学や心理学、社会学、経済学、経営学、民俗学、文化経済学などの様々な学際的分野からの成果を統合化し、それら成果を踏まえ、超高齢者の人間発達と地域コミュニティ特性という2つの視角からアプローチして、実証研究につなげている。

##### 4.1 超高齢者の人間発達へのアプローチ

###### 4.1.1 ジェロントロジー（老年学）からネオ・ジェロントロジーへの転換

本研究では、長寿・超高齢社会における元気な高齢者／超高齢者の出現を背景に、加齢を一律に衰退・衰えととらえていたジェロントロジー（老年学）から、学際的で多様な高齢者像・人間発達の視野に立つ、新しい老年学ともいえるネオ・ジェロントロジーの視点に立脚する。つまり、高齢者を虚弱で支えられる者として、福祉的分野を主に研究してきた老年学から、「<老い>の豊かさや価値についての歴史的・思想的・比較文化的分析、蓄積された経験が大きな資産となり、これらによって形成された暗黙知の伝承の民俗学的・文化人類学的考察などを含んだ研究への必要性」に注目したのである。

このような、老いの豊かさに光を当てることによって、超高齢者の生活基盤や医療を支えている社会保障制度の積極的側面もまた評価の対象となりうる。この視点から、奄美の健康長寿者を生み出す地域の経営や社会経済システムに注目する。奄美の超高齢者の家計面は、現役世代が担う国民年金や医療保険制度、自治体の敬老慰労金に支えられている。自給自足的経済も加わるが、現金収入の持つ意味は大きい。超高齢者の自律生活において、家族や近隣との付き合いなど、生活の質を確保する現金の意味合いは大き

いのである。

老いの価値や超高齢者の潜在能力に光をあてるネオ・ジェロントロジーの分野から、経済のみならず文化をも視野に入れることによって、健康長寿を実現する奄美のシマ（集落）の社会経済システムの考察が可能となる。

#### 4.1.2 マクロな超高齢社会論からミクロな長寿・超高齢社会論への転換

これまでの超高齢社会論においては、経済資本に限定された従来の大量データを集めたマクロ的な議論が主流であった。それに対し本研究では、地域という視点から、教育や文化を含む身近なデータなど、微小で多様なものを集めて積み上げる。そのことで、従来は見ることでできなかつたもの、見落としていたものも見えてくると判断する。

つまり、これまでの超高齢社会論では、超高齢者は叡智やノウハウなどの潜在能力を持つ存在ではなく、単なる量として把握されていた。その結果、超高齢者一人ひとりの役割や機能、存在意義を主たる研究対象とはしていない。その理由は以下のとおりである。

第一にあげられるのは、超高齢者は所得を獲得する能力を欠いた存在、つまり、所得を獲得する能力をもつ人々にとっての負担、あるいは、コストとして把握する傾向である。この場合には、高齢化の進行は社会保険料、租税など、社会的負担の増として把握される。これらの研究の視点は、人的能力を各人の稼得能力、所得獲得能力として把握している点に特徴がある。したがって、高齢化は経済資本の減少、所得獲得能力の低下を意味し、超高齢者は（所得獲得能力の高い）現役世代からの世代間所得再分配によって支援される存在となる。この結果、超高齢者層全体がマイナスイメージで把握され、超高齢者の増加は社会的コストや社会保障費の増大として、人々の意識においては負のイメージが共有されていく。

第二にあげられるのは、人的能力を経済資本として経済的価値を生む「元手」あるいは、「元本」として把握していることである。しかし、人間を人的能力としての経済資本や稼得能力に限定せず、それらを稼得能力を獲得する前提条件ともいうべき、潜在的諸能力の獲得過程にまで視野を広げる必要がある。そうすれば、「稼ぐ」には職業能力が必要であること、職業能力を身につけるには、幼児期には家庭における人格形成教育、地域における社会教育や義務教育、後期中等教育、職業教育や高等教育などの学校教育の存在が浮かび上がってくる。

本来は、一人ひとりの発達や生きがい、生活の質をも取り扱わなければ稼働能力の形成の前提条件は解明できない。だが、大量現象としての高齢化に焦点が当てられた結果、超高齢者の価値は負担感ばかりが強調されている。このようなマクロな視点では、超高齢者の教育機能や地域貢献を通じた地域の発展、さらには、少子高齢化社会からの脱却という未来への道筋は見出されない。

#### 4.1.3 超高齢者の潜在能力への視座

人間発達の経済学における「潜在能力」の視点は、超高齢者への新たな理解を示唆している。1980年代、A.センは、商品開発の経済学から人間発達の経済学へ、という経済学のパラダイム転換を提起した。そこでセンは、人間の幸福な状態や福祉の水準としては、人が達成に成功する「機能」（人がなしえること、なしうること）と、人がこれらの機能を達成する「潜在能力」に関心を寄せている。また、「貧困は単に所得が低いというよりも、むしろ基本的な潜在能力の剥奪である」と指摘する。

このことを、超高齢者の現実には当てはめるならば、年金等の充実で生存の最低限度の所得は保障されているものの、社会的役割から離脱させられた高齢期／超高齢期を過ごす人にとっては、自らの自己実現や生きがい創造の機会は少なくなる。そのような環境下にある彼ら／彼女らは、物質的には豊かな生活であっても、いわば潜在能力のはく奪状況として、精神的には生きがいのある生活とはいえないだろう。現に、祭りや伝統行事が希薄になった都市部では、地域の年中・共同行事も薄れ、それに伴い地域の多様な職人能力も衰退している。超高齢者は、地域での社会参加や役割を發揮する機会もなくなっている。都市での高齢者／超高齢者の孤独や孤立化は深刻な状況にある。

一方、文化経済学の視点からの超高齢者は、地域コミュニティにおける自然や伝統文化から学びつつ、これまでの経験、熟練した技やノウハウを蓄積し、目には見えない無形の文化資本を体化した存在として捉えられる。実際、祭りや伝統行事が継承されているコミュニティでは、超高齢者は先代から引き継いだ習慣や祭りの精神、技、ノウハウを次世代に伝える機会と役割の場がある。

#### 4.1.4 超高齢者の幸福への視座

幸福の基礎としての文化と経済の関係は、量産体制下では矛盾すると考えられてきた。しかし、両者が多品種少量生産システム時代や、祭り、民俗芸能、農林漁業や地場産業

などの発展と相互補完的であるとの研究が進んでいる。また、文化経済学からは、心理学が発見した超越の境地を、幸福を実現する近道の発見と実践による文化資本の充実として位置づけることができる。そして、この道の生き方を構想する力量を身につけた人々として超高齢者が位置付けられる。他方、超高齢者は文化資本を身につけているだけでなく、人生の各段階でそれぞれに自らの生き方を構想・創意工夫・ノウハウとして蓄積し、最終段階では最適なものを選択するという事実も重要な意味をもつ。

加えて、加齢に伴う幸福感の増大を超高齢者のポジティブな発達とみなす老年的超越理論からの示唆がある。超高齢者は、加齢に伴う精神的発達によって現役世代と異なる価値観や世界観の変容を経て、高齢者よりも幸福感が高まることが実証されている。同様に生涯発達心理学からは、超高齢期における適応的な発達が可能であることを示めすバルテスの SOC 理論からの示唆がある。これらの理論からは、超高齢者は構想力（ノウハウといえる）によって、少ないエネルギーを最適化して行動していることに注目することができる。

## 4.2 地域コミュニティへのアプローチ

### 4.2.1 老いの価値への社会経済的視座

超高齢者が増大している今日の時代には、これまでの現役世代の価値観である経済的・物的な財や資本への貢献度だけではなく、老いの経験が無形資産（価値）や社会の共通資本として、社会経済的に考察するプロセスや老いの潜在能力を経済学的に考察することが求められる。

しかしながら、近代化や高度成長、都市化の進行で、コミュニティの希薄化、農村における稲作の衰退などによって地域固有の文化は弱体化し、自然資本と共生する文化資本としての無形資産の研究は、民俗学などで触れられてはいるものの研究の蓄積がない。

このようななかで本研究が注目するのは、無形資産はかつての日本の伝統的共同体に一般的にみられた、祭りや習慣、結いを媒介としたものであること。そしてこれらは、互いの生命や生活を尊重しあう相互支援・互助の人間関係のなかで形成されていたものであるということである。

さらに社会経済的視点からみると、個人は孤立した存在でなく、様々な経済・社会関係を築き、歴史的背景をもつ社会的存在でもある。加えて、自然や風土と共生し、家族や社会集団、地域コミュニティと関わりながら暮らす生活のなかでは、超高齢者は知恵

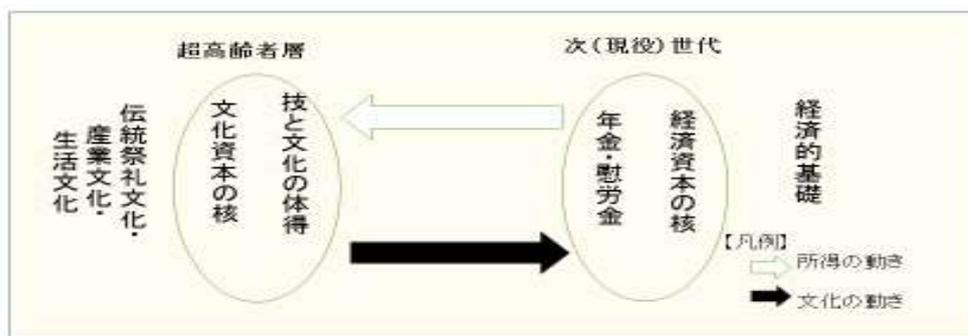
者としての役割があり、潜在能力を発揮する居場所があった。

例えば天野（2006）は、民俗学者宮本常一の著書『忘れられた老人』には、「狭くて息苦しい、利害の衝突しがちな村共同体の中で、常に共生の可能性を求めてきた老人の『知』のありようが見てとれる」と記している。その根拠として、「老人の知が持つ有効性は、長年にわたる経験の中で蓄えられてきたことだけにあるのではない。それが世俗の秩序に拘束されない自由さを持っているからである。…そこにあるのは、衰退した老いの姿ではない。村の歴史の流れを見通し、共生への志をもった老いの姿である」と論じている。かつての日本の老人たちは、地域コミュニティでの役割やノウハウを発揮する存在として重要な役割を果たしていたことがみえてくる。共同体の基盤が残る奄美の超高齢者のポジティブな心性や適応、幸福感を解明するうえで重要な視点となる。

#### 4.2.2 文化資本と経済資本の再分配システムへの視座

超高齢者層の文化資本と次（現役）世代のもつ経済資本との相互交流・連関としての文化資本と経済資本の再分配システムは以下のように考えられる。

図表 序-1 地域コミュニティにおける文化資本と経済資本の再分配システム



健康長寿を体現している超高齢者は、豊富な人生体験の中で、伝統祭礼文化・仕事・生活における知識・ノウハウ・職人の力量などを文化資本の核として蓄積している。そのような役割の場があるコミュニティでは、超高齢者は文化を再生産する担い手でもある。一方、超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎は、現在の社会保障制度における国民年金制度や医療保険制度であり、ここには、次（現役）世代から超高齢者への所得の再分配が行われる。超高齢者は自己の文化資本を活かして、次（現役）世代との学びあい・育ちあいの交流の場を通じ、超高齢者と若い世代との文化の再分配システムが機能する。

これらのことを踏まえて、奄美のシマ（集落）において文化資本と経済資本の分配がどのように機能するか、実証を通じ明らかにしていくこととする。

#### 4.2.3 文化資本を生かした長寿地域の地域経営

地域の祭りや伝統行事が健康長寿と幸福な老いに与える影響についての考察は、筆者以外の先行研究では見当たらない。しかし、超高齢者の人間発達をめぐる自然や社会の環境要因や地域・場における存在意義や主体的役割について研究の視野を広げていくと、新たな超高齢者像が見えてくる。すなわち、自然環境を保全しつつ、人と人との心のつながりや信頼関係を持続的に発展させる力量を身につけ、先覚の実践や智慧、徳などから学び継承するなかで、個々人は多様で質の高い文化資本を体得している超高齢者像である。

そのことを、長寿地域である奄美のシマ（集落）でみてみよう。一つ目に、奄美には日本の各地で廃れていった伝統的共同体の基盤がある。二つ目に、自然環境に恵まれ、昔からの祭りや年中行事、民俗芸能などの伝統行事が継承されている。三つ目に、集落の環境整備などの年中行事や共同作業などの集落自治の取り組みがある。四つ目に、相互扶助や結いの習慣のなかで絆やつながりが強固に残っている。これらコミュニティの基盤が長寿の地域要因や支援要因となって、自律し長生きを楽しんでいる超高齢者の実態が明らかにされてくる。

長寿地域の奄美には、豊かな自然や新鮮な食べ物などの自然資本、交流や馴染みの関係などの社会関係資本、年中行事や伝統行事などの文化資本など、経済資本に還元できない長寿を支える豊かな資源が存在している。奄美のシマ（集落）に着目し、文化資本が活かされた健康長寿の地域経営を考察する意味がここにある。

一方、都市部では、高度成長期の人口集中・流入の中で宅地化が進行し、自然は減少し、伝統的な祭りなども衰退していった。退職後の高齢者／超高齢者は地域コミュニティでの地域の絆が断ち切られ、希薄化の中で孤立し、彼ら／彼女らの地域での役割や居場所はなくなってきている。高齢者は年金制度と引き換えに地域貢献する働く場を失ったともいえる。

#### 4.2.4 健康長寿のまちづくりへの視座

昨今、従来の医療や福祉行政の枠にとどまらない、まちづくり、都市政策として、健

健康長寿のまちづくりが注目されている。超高齢社会への挑戦として、国や自治体、先進企業で取り組まれている。そこでは、“2025年問題”に象徴される介護問題への解決が急務だという危機意識が共有されている。加えて、健康長寿のまちづくりを推進するには、健康寿命だけを取り上げて個人モチベーションになりえないという認識がある。

つまり、辻（2017）は、「人は長生きのために長生きするのはなく、家族と自分の関係や地域における自身の存在意義を背景として元気に活躍するのであって、そういう意味でコミュニティの有無は超高齢社会に大きな影響を及ぼす」と指摘する。これまでの健康寿命重視から、コミュニティの中で自分がどう生きるかという視点が長寿の時代には重要である、ということが指摘されるようになったのである。

今後、長寿・超高齢社会にふさわしい、健康長寿のまちづくりをすすめていくためには、地域コミュニティの再生、つながりやきずなの再生、超高齢者と次（現役）世代との共生などの課題が浮かび上がってくる。それぞれの地域固有の自然や文化資本を活かし、家族・近隣・地域・多世代がつながる。そのような地域コミュニティを創造していく。そのことこそが、長寿時代にふさわしいと健康長寿のまちづくりの道筋となろう。

さらに健康長寿を共有するためには、長寿地域の農村と都市との交流も重要となる。健康長寿の地域要因を豊かに内蔵している農村の住民の経験と、地域のきずなが希薄になった都市の住民が、お互いの資源を交換しながら交流しあって、ともに健康長寿を実現するという新たな仕組みも必要となってくると考える。

以上、先行研究の課題から本研究を通観する視角をまとめてみると、超高齢者の健康長寿や幸福感の高まりは、地域固有の自然や文化、習慣などの地域のコミュニティ特性を含めて考察することによって、解明されるということである。つまり、超高齢者は、地域の固有の歴史や文化、ノウハウを次世代へつなぐ主体的な自己を確信することで、受動的な幸福感だけでなく能動的で超越的な幸福感を持つように深化していく。そのことが解き明かされるのである。

しかしながら、現状では、超高齢者の地域貢献に注目した能動的な老いがもたらす健康長寿の効用や、それを支える地域コミュニティの役割に焦点をあてた研究は見当たらない。本研究は、伝統的共同体の残る長寿地域、奄美の自然資本・文化資本・社会関係資本に注目し、超高齢者の長寿と幸福感を紐解くことによって、この未踏の領域を切り拓こうとするものである。

## 5 各章の関連性と概要

本論文の構成は序章・終章を含めて、全 11 章で 3 部から構成される。序章は、長寿・超高齢社会論と人間発達への地域コミュニティ・アプローチとして、本研究の中心となる研究課題の章であり、本研究全体を通観する部分である。**第 1 部は**、人間発達と地域コミュニティに関する理論編として、3 章から構成される。

**第 1 章は**、超高齢期の機能と適応に関する章で、本研究の対象者である超高齢者について老年学分野の先行研究をベースに、超高齢期の生物的・心理的・社会的特性を明らかにするとともに、精神的次元のスピリチュアリティや老年的超越に注目し、超高齢者の精神的適応につながる考察を行っている。このことから、超高齢者は、前期・後期高齢者とは異なる心理適応があることが明らかにされる。

**第 2 章は**、「老年的超越理論」を用いて、超高齢者のポジティブな心性を考察している。特に、超高齢者の人間発達と脆弱な身体に適応し幸福な老いを実現する要因については、加齢に伴う発達に焦点を当てた老年的超越理論から考察することによって、超高齢者のポジティブな心性と老いの成熟の多様な側面が明らかにされた。これらから、奄美の超高齢者の幸福感を紐解く理論的基礎が提示される。

**第 3 章は**、奄美における文化資本を活かした地域経営と社会経済システムの機能に光をあてる。それを解説するうえでキーワードとなる、地域経営や社会経済システム概念を捉え直し、奄美の長寿を実現している内部の諸要因を明らかにしている。特に、祭りや伝統行事を継承してきた奄美のシマ（集落）の伝統的共同体の機能に注目する意義、そして、都市コミュニティの崩壊の中で、伝統共同体のなかにあるつながりやきずなの今日的意義、祭りが継承されている長寿地域での地域経営の持つ意味、さらに、長寿・超高齢社会の進展の中で、奄美のシマ（集落）の健康長寿のまちづくりのモデルとしての可能性について言及している。

**第 2 部では**、翻弄され、抑圧された奄美の歴史やその成り行きを紐解き、現在の人々の寛容性ともいえる精神的大らかさの原点を明らかにしている。さらに、奄美の辿ってきた歴史から形成されているシマ（集落）の暮らしと伝統行事や習慣に密着し、超高齢者の幸福感の醸成に関わる文化資産について、民俗学的視点からも学びつつ、掘り下げている。そのなかから、奄美のシマに残る祭りや伝統行事などの文化資本の役割や結いの習慣などが、奄美の社会関係資本を豊かにし、実質所得だけでは測れない豊かさと幸福度を高める要因が明らかにされている。

**第4章**は、奄美の辿ってきた特異な歴史と人々の寛容性（大らかさ）に焦点を当てている。奄美の歴史を辿ることで、搾取された奄美の人々の精神世界が理解された。そして、祭りや伝統行事は過酷な労働を生きる力に変換し、人々のエネルギー源として機能していった歴史や、極貧のなか乏しい食料を分け合い、命をつないできた結いの基盤が明らかにされている。

**第5章**は、奄美のシマの豊かな伝統文化と超高齢者の役割をテーマにした実証編で、奄美における自然資本、文化資本、社会関係資本の実際について、フィールド調査やアンケート調査、インタビュー調査から明らかにしている。

奄美のシマ（集落）の生活空間には祈りの居住空間や自然を崇めるアニミズムの世界が残っている。暮らしの中に祈りの世界があり、カミ山、カミ道、行事の際の祭場や祈り場がある。これらは、厳しい自然の中で生きていくための生存の知恵として、今も継承されている。また伝統行事の豊年祭や八月踊りは、日常の「ケ」から非日常の「ハレ」の行事となって、1年のエネルギーを蓄積する場であり、なかでも超高齢者には儀式や技を伝える役割の場が用意されている。

さらに、年齢に関する伝統行事、年の祝いは奄美独特の行事があり、祭りや伝統行事は、シマの人々の共同行事として、お互いの無事と豊作に感謝する、楽しみの場として機能している。超高齢者はこのようななかで、さらに長生きを目指すエネルギーが醸成されることが明らかにされている。

**第6章**は、現在の奄美のコミュニティの「場」が、超高齢者の幸福感にどのような影響を与えているかを分析している。伝統行事や習慣、信仰を中心とした暮らしや、超高齢者を支援する奄美の集落や地域の取り組み、そして現代版の結いの機能の実際に注目し、奄美の「場」と「場所の意志」から超高齢者の主観的・客観的満足感の連関が明らかにされている。

加えて、集落の区長へのアンケート調査からは、奄美の集落の紐帯の強さ、伝統と習慣の継承の高さ、社会関係資本の豊かさ、高齢者評価の高さ、健康長寿者の多さが明らかにされている。カイ二乗検定からは、老人クラブの加入率の高さは集落の高齢者の活動の高さ、集落の紐帯の強さ、集落行事の多さ、集落の伝統行事の継承などと統計的に有意に関連することが明らかにされている。このことは、超高齢者の活動は、集落の紐帯の強さや伝統行事の継承に大きな力を発揮しているということである。

さらに、奄美のシマ（集落）には、現役世代からの年金や子どもや行政からの長寿祝

い金などを受け取りながら、一方で、超高齢者の持てる叡智や文化資本を次世代の安心や地域づくりに生かす社会経済システムが機能していた。このようなシマ（集落）の地域性と超高齢者の自律意識が相乗効果となって、長寿を実現する地域経営として機能していることが明らかにされている。

**第3部**は、3章構成で、超高齢者の老いと文化をテーマにし、超高齢者へのインタビュー調査やアンケート調査から構成されている。

**第7章**は、奄美の超高齢者の老年的超越意識の量的調査について、高齢者との比較も加え、統計ソフト SPSS で分析したものである。暮らし向きや行動能力、心理適応、老い観、そして、老年的超越については筆者の老年的超越尺度を用いて実証した。その結果、超高齢者の高い生活満足感と高い地域愛着度などが明らかにされ、健康な超高齢者は100歳をめざしていることが浮かび上がってきた。

老年的超越の因子分析からは、下位次元として、宇宙的超越、自我超越、執着の超越の3つの次元が明らかにされた。執着の超越は、北欧では見られなかったもので、日本特有の文化に起因するものと考えられる。これらの結果からは、ネガティブな超高齢者観を否定し、身体能力は衰えながらも老いと共存し、満足感の高い暮らしが実現している実態が明らかにされたのである。

**第8章**は、奄美の超高齢者の長寿と幸福な老いの語りについての質的調査の結果である。分析手法は、質的分析法の1つである M-GTA（修正版・グラウンデッド・セオリー・アプローチ）法を用いて行った。M-GTA 法は分析の最小単位 of 概念をつくり、概念をカテゴリー化してコアの概念を導くもので、その結果からは、老年的超越の3層構造モデルが明らかにされた。最下部には人格形成基盤の次元、日々の営みの次元、そこから精神世界につながる次元である。中心部の日々の営みの次元には、「目標は100歳」というコアカテゴリーが導き出された。

さらに、超高齢者が到達していく精神世界の次元では、「目標は100歳」という長生きを楽しむ生と向かいあいながら、「老年的超越」が形成されていく。老年的超越の次元は、第7章の量的調査から明らかにされた3つの次元を追認するものであった。奄美の超高齢者の目標は100歳というポジティブな側面に起因するのは、社会関係資本が重層し、豊かな人間関係のみならず、自然とのつながりや文化を媒介とした自己の有用性がその要因であることが明らかにされた。

**第9章**は、与論島における在宅死と看取りの文化についての質的調査である。奄美は、

『文芸春秋』2014年5月号で全国の在宅医療充実度ランキングで第1にランクされている。その象徴的な島が与論島である。病院死が8割を超える日本において、入院できる病院（81床）がありながら、与論島は逆に自宅死が8割を超えている。その要因を分析している。

最終章では、以上の理論・実証研究から明らかにされた地域コミュニティにおける長寿と幸福な老いの課題と展望を示している。

## 6 本研究の到達点

### 6.1 文化資本を活かした地域経営モデルを提示

一つ目は、文化資本を活かした地域経営のモデルを提示したことである。超高齢者を包摂しながら持続可能なコミュニティを形成しているシマ（集落）のコミュニティ、さらには超高齢者の長寿と人間発達を支える長寿地域の地域経営ともいえる、文化資本を活かした地域経営の実態を明らかにした。加えて、地域での役割や信頼感などの「つながり」意識が、超高齢者の存在意義や潜在能力を高め、精神的次元にも安寧をもたらす効用となること。このことは、地域とのつながりのなかで老いることの重要性が再認識された。

また、長寿の地域要因を解読する試みは、これまでの長寿研究にはない視点であった。本研究から、幸福な老いを実現するうえで地域のコミュニティ環境づくりの重要性が理解される。加えて、地域での祭りの年中・伝統行事の継承や、地域での超高齢者の潜在能力を活用する有効性が明らかにされた。現代における結いや知識結いに焦点化すると、多世代の交流を目指した新たな地域再生と健康長寿のまちづくりにとって有用な視点がみえてくる。

### 6.2 経済資本と文化資本の再分配機能の解明

二つ目は、経済資本と文化資本の再分配機能を解明したことである。奄美の長寿を実現しているシステム構造は、経済資本の軸と教育・文化にかかわる軸からとらえることによって、文化資本と経済資本との関係が解明でき、文化資本の影響を受けて、経済資本にも変化が現れることが明らかにされた。

文化資本の軸として、超高齢者の人生体験から獲得された「目にみえない文化資本」から、祭りなどの文化的伝統が伝えられ、次（現役）世代はこれらの文化的伝統を創造

的に発展させる場が提供される。同時に、経済資本の軸から見ると、超高齢者がこのような機能を発揮しうる基礎は、国民年金制度や医療保険制度である。これらの制度によって超高齢者は衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力を得て文化の再分配システムを機能させる。文化の再分配システムは、現役世代の所得を生み出す基礎となり、さらに経済資本を生み出すという循環が生じる。

つまり奄美には、超高齢者層が地域コミュニティにおける文化を再生産する担い手となり、次世代との学びあい・育ちあいの中で文化資本が継承され、創造的に発展していく姿があった。地域コミュニティにおける超高齢者層の文化資本と経済資本の総合的考察を通じて、地域再生の展望を実証的に解明することができた。

### 6.3 都市と農村における社会保障システムの相互連関

三つ目は、都市と農村における社会保障システムの相互連関を明らかにしたことである。超高齢者がこのような機能を発揮しうる経済的な基礎としての社会保障制度、すなわち国民年金制度や医療保険制度である。年金など、現役世代からの超高齢者への所得の再分配が行われ、超高齢者にとっては少額であっても、衣食住、移動、交流などの機会を活かす経済力となるのである。

同時に、都市における人権や学習社会に向けての動きは、工場法などの成立を契機に社会権が確立に向かい、すべての市民を対象とする社会保障制度を生み出し、このシステムが農村部や地域コミュニティにも普及し、人権、学習権、生存権、営業権などを支える近代的システムとして定着した。都市高齢者の成果の上に、新たなシステムは全国・農村部にも広がり、地域コミュニティにおける高齢者の経済基盤の一つとなったのである。

本結果からは、地域コミュニティにおいて超高齢者層の文化資本と経済資本の相互連関・交流が明らかにされるとともに、今後は、都市と農村における社会保障システムとコミュニティの再生・持続的発展へのつながりが考察可能となったのである。

### 6.4 奄美の長寿多子化の要因の解明

四つ目は、奄美の長寿多子化の要因を解明したことである。奄美は、健康長寿者の多さと同時に、高い出生率をも実現している。その地域的・文化的要因を、経済資本に還元できない奄美のシマの豊かな資本に求め、自然・風土、伝統文化、習慣・信仰、結い・

知識結いなどのコミュニティ特性から解明することができた。

つまり、奄美の長寿多子化を実現している要因は、固有の伝統文化を内在するシマ(集落)の共同体コミュニティから育まれた、幸福感を醸成する伝統的心性ともいえる「大らかさ」である。奄美の人々のこのような幸福への価値観は、従来の経済学の「効用」を最大化して行動する物的資本の経済資本ではなく、奄美の固有価値を形成する自然資本、文化資本、社会関係資本の3つの資本から成り立っているということである。

このことが超高齢者の潜在能力を引き出し、長寿を尊び、「子どもは地域の宝」という価値観を形成する。近隣の支援環境のなかで、超高齢者にとっても老年的超越を形成する幸福な老いと長寿に導かれ、これらは、子育て中の母親にとっても安心して暮らせる環境となって、長寿多子化をもたらしている要因として明らかにされたのである。

## 7. 残された課題

一つ目に、本研究から明らかにされたのは、日本の近代化の過程で失った伝統的共同体が持っていた豊かな社会関係資本の重層性である。これら資本は長寿の時代を生きる今日の人々こそ、最も希求していることであるということである。今後、他地域でのコミュニティ再生に際し、重要な研究課題として浮かび上がってきたことである。

二つ目に、現在の年金や医療などの社会保障制度の中で、経済と健康の基盤を得た超高齢者は、自らが内在する文化資本を生かし現役世代の経済資本を活用しながら、生き生きとした老後を過ごす上での地域コミュニティの果たす役割の重要性である。

ここにおいては、祭りや伝統行事が地域コミュニティの結束の源であり、長寿を支援する地域経営としてどのように生かすという地域課題が浮かび上がってきたことである。

三番目に、さらに少子高齢化が進む日本では、健康長寿と出生率の向上は今後の大きな政策課題として横たわっている。しかし、本土からはるか離れた離島で、GDPの経済指標では低域にある奄美で長寿と子宝が実現している。このことに注目して、奄美の事例からそれぞれの地域が解決のための方策を考えていくという課題が浮かび上がってきたということである。

四つ目に、本研究が明らかにした結果は、長寿地域奄美の超高齢者という限定された地域・対象者であった。このことから、今後は同テーマで、それぞれの地域で実証を重ねていき、人生100年時代に対応する健康長寿と幸福な老いを全国的に実現していく

という研究課題が残されている。

## 8 おわりに

近年の健康長寿のまちづくりにおいて、健康寿命を伸ばすには個人のモチベーションだけでなく、社会との多様なつながり、とくに家族や地域における自分の存在意義が欠かせないことが指摘されるようになってきた。

人生 100 年時代を迎え、健康概念も変化している。これまでの「健康」か「病気」という 2 区分でなく、大多数の人は、“病気は持っているけれど病人ではない”「未病」の概念が提案されるようになってきた。

改めて、長寿・超高齢社会では、「未病」の人がより多く地域で暮らせるコミュニティの創造が重要となっている。奄美では改めて「未病」の概念を使うことなく、「未病」の人が多く活躍しているコミュニティである。都市部で気づき始めた健康長寿のまちづくりにおいても、奄美の事例は先進地として参考になろう。

加えて、地域消滅の危機感が高まる中、奄美の事例が示すことは、祭りや人々のつながり、きずなが続く限り地域は消滅しないということである。その要には、地域の財や文化資産を体化する超高齢者と、次（現役）世代とが学びあい・育ちあう場の重要性がある。文化創生、地域創生の健康長寿のまちづくりは、そのような場を通じてこそ実現するであろう。

最後に、都市と農村、伝統の技や文化との共生については、研究が開始されたばかりであるが、今後の日本における地域コミュニティの研究を拓くうえで重要な視点となる。今後は、農村の地域コミュニティの経験から学びつつ、都市における地域コミュニティ再生に向けて、都市部や現役世代を対象とした同様の調査を行うことが課題となっている。

健康長寿と幸福な老いに向けて、地域経営の視点からコミュニティ研究が一層発展し、実証する方向性と課題を確認して、本論文の展望としたい。そのことによって、ポジティブな長寿・超高齢社会への未来が期待されてくる。